

SHOW HEY シネマルーム



Data

監督: ダニエル・アルフレッドソン
原作: 原作: スティーグ・ラーソン
『ミレニアム2 火と戯れる女』
出演: ノオミ・ラパス/ミカエル・ニクヴィスト/レナ・エンドレ/ペーテル・アンデション/アンデルス・アルボム・ローセンダール/ゲオルギ・スタイコフ/ミッケ・スプレイツ/ペール・オスカーション

👁️👁️ みどころ

鼻のピアス、背中タトゥーなど、「異相」が売りモノ(?)のヒロインがなぜ誕生? そんな『ミレニアム』シリーズは、今世界中で大ヒット。その理由は簡単。面白いからだ! ミレニアム社のジャーナリストが殺されたのはなぜ? そこにリスベットの指紋が残っていたのはなぜ?

そんな展開から始まる2部では『寒い国から帰ったスパイ』(65年)並み(?)の複雑な背景事情に注目! その中で解き明かされる、あっと驚くリスベット出生の秘密とは? ハイライトはラストの死闘。身長150cm、体重40kgのリスベットの身体のどこにこれだけのエネルギーが・・・?

* * * * *

これぞサスペンス! 計7時間以上だって!

2009年12月14日に観た『ミレニアム』シリーズ第1部『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女』は153分の長尺だが、メチャ面白かった。その2部と3部が一挙上映されると聞いては、観ないわけにはいかない。

2部が130分、3部が148分だから、3作合わせると計431分。7時間以上の超大作だが、何よりも身長150cm、体重40kgの女優ノオミ・ラパスが演じるヒロイン、リスベット・サランデルの個性が強烈だし、雑誌『ミレニアム』の発行責任者ミカエル・ブルムクヴィスト(ミカエル・ニクヴィスト)をはじめとする主要人物たちのキャラが明確だから、複雑なストーリーにもかかわらず、ポイントはつかみやすい。

『ミレニアム2』はヒロイン出生の秘密がポイント?

1部はミカエルもリスベットも依頼された事件の解決を目指すお助けマン的役割だったが、2部では元ソ連の情報機関GRUのスパイだったというザラことアレクサンデル・ザラチェンコ(ゲオルギ・スタイコフ)やその部下たる巨大な金髪の男ロナルド・ニーダーマン(ミッケ・スプレイツ)がキーマンとして登場し、リスベットのあっと驚く出生の秘密が明らかにされていくからそれに注目!

日本は最近、親による子殺し、子による親殺しという痛ましい犯罪が増えているが、2部のラストに訪れる修羅場は何とも凄惨。なぜ、そんなことに?

2部のストーリーの軸は?こりゃ、わかりやすい!

2部は、少女売春組織を追った特集号の発行準備を進めていた『ミレニアム』の担当ジャーナリストが殺害され、その現場にリスベットの指紋が付いた銃が残されていたことがストーリーの軸。そのためリスベットは指名手配されることになるのだが、リスベットの無罪を確信するミカエルは『ミレニアム』の編集長であり、愛人でもあるエリカ・ベルジェ(レナ・エンドレ)の協力を得ながら、特集号を発行すべく調査に精力を注ぎ込んだ。他方、リスベットも自身に仕掛けられたワナを暴き、真犯人に迫るべく懸命な活動を。こりゃ、サスペンスものによくあるパターンだからわかりやすい。

スパイものは難しいが・・・

『ミレニアム』シリーズにはハリウッドからのリメイクのオファーがすごいらしいが、大ヒットした『ミレニアム ドラゴン・タワーの女』はもちろん、この2部も3部も日本にはなじみの薄いスウェーデン映画。したがって、ロシアの情報機関GRUのスパイがなぜスウェーデンに亡命?そんなストーリーは日本人に少しわかりにくいのが、1950年代後半から60年代にかけての東西冷戦時代には『寒い国から帰ったスパイ』(65年)をはじめ、スパイの亡命モノは面白いと相場が決まっていた。

亡命してきたスパイの大物の処置にはどんな国でも頭を悩ますはず。スウェーデンにも公安警察があるらしいが、ジャーナリスト殺人事件に取り組んでいるストックホルム警察のヤン・ブランスキー(ヨハン・シレーン)とその部下の女性ソーニャ・ムーディグ(ターニャ・ロレンツソン)の活動とは全く異なる公安警察の活動とは?そこらあたりのややこしい展開は、是非あなた自身の目で。

リスベットの生い立ち?

1部はある少女の失踪事件をミカエルとリスベットが追っていくというストーリーが軸だったが、奇妙な格好をトレードマークにした天才ハッカー、リスベットのねじ曲げられた性格(?)を明らかにするために不可欠だったが、リスベットの生い立ちの説明。とりわけ、父親にガソリンをかけマッチを投げつけることによって瀕死の重症を負わせると

いう異常な行動（犯罪）をめぐる、リスベットの処遇は？

リスベットの弁解は、「父親の虐待から母親を守るため」ということだが、いくら少女でもそんな弁解で無罪放免となるはずはない。リスベットの精神鑑定が実施され、リスベットが精神病院に送られたのはある意味必然かも・・・？



©Yellow Bird Millennium Rights AB, Nordisk Film,
Sveriges Television AB, Film I Vast 2009

キーマンは二大極悪人！1部もしっかりと！

そんなストーリー展開の中で登場してくるキーマンは、精神科医のペーテル・テレボリアン（アンデルス・アルボム・ローセンドール）と後見人となった弁護士のニルス・ビュルマン（ペーテル・アンデション）。世間から完全に隔離された精神病棟内での患者の処遇には人権侵害の問題が多いらしいが、リスベットは精神病患者だとする鑑定意見を書いたペーテルのリスベットに対する処遇はそりゃひどいもの。さらに、リスベットの元後見人のホルゲル（ペール・オスカーション）はリスベットの良き理解者だったが、その後選ばれたニルスはペーテル以上にひどい奴で、そのレイプシーンは1部でしっかり描かれていた。もちろん、それを黙って我慢するリスベットではないから、ニルスに対する復讐シーンも1部ではタップリと描かれていた。

しかして、2部ではそれらの回想シーンがしばしば登場する中で、ペーテルとニルスという二大極悪人が重大な役割を演ずることになる。こりゃ、やっぱり1部をしっかり観ておかなくちゃ。

2010（平成22）年8月3日記